

【タイトル】 セラピストが「臨床思想」を持ち・整えていくということ

【副題】 アドラー心理学の「臨床・実践思想」から考える

【抄録】

セラピーの効率性・効果性・実効性を追求し、議論を重ねてきた当学会であるが、これまで様々な「臨床技法」や「臨床理論」が生み出されて、次々と新しい理論・技法が紹介されてきている。それゆえ、これまでの議論が、セラピーにおける理論・技法について主に議論されてきたことは確かであろう。

八巻(2017)は、より実効的なセラピーを生み出していくために、これまでの臨床における「理論」と「技法」だけではなく、「臨床思想」というものについても、もっと丁寧に議論すべきであることを提案した。そこでは、ブリーフセラピーの発想の原点として、G. ベイトソンと M. エリクソンに加えて、それ以前の心理臨床家であるアルフレッド・アドラーもいることに言及した。アドラーが提唱した個人心理学(＝アドラー心理学)は、「理論・技法・思想」が三位一体となって体系化されているのが特徴である。アドラー心理学における思想の根幹をなすものは「共同体感覚 Social interest」であるが、それは「ヨコの(あるいは水平な)関係」を作っていくことが、人が幸せになる重要な鍵を握っているという思想である(鈴木ら, 2015)。

心理臨床活動においてセラピストは、理論や技法以上に、この「臨床思想」を持つことが重要なのではないだろうか。「臨床思想(あるいは実践思想)」というものを、セラピストが心理臨床活動の中で捉えながら、セラピスト自らの中で整えていくことは、様々なケースに対して、「どう見立てるのか」や「どう手立てを考えるのか」という問いを立てる以前に、セラピストとしてそのケースに対して「どう臨むことが大切なのか」という基本的姿勢としての問いを立てることができるようになる。それは日々の臨床活動の中で、セラピストとしての「軸」、あるいはセラピーを行う「体」を作っていく重要な作業になりうると思われる。つまり、「臨床思想を持ち・整える」という作業によって、各々のセラピストが自ら持っているリソースにアクセスすることができ、そのセラピストの持ち味が発揮される、まさにオーダーメイドな実効的なセラピーを柔軟に作っていくことが、可能になるのではないだろうか。

本シンポジウムでは、あらためてセラピストにとっての「臨床・実践思想」とは何であるか、そしてそれをセラピストが持ち・整えていくことに、どのような臨床的意義があるのかについて、アドラー心理学を志向する3名のシンポジストによって話題提供してもらおう。さらに参加者の皆さんと共に「臨床・実践思想を持つことの意義」について議論を行っていきたいと考えている。より実効的なオーダーメイドなセラピーを志向している方の参加を期待している。

【キーワード】 臨床思想、アドラー心理学、共同体感覚

【引用文献】

八巻 秀 (2017) 〈ブリーフ〉はどこから来たのか、そして、どこへ向かうのか：〈ブリーフ〉の臨床思想の試案. ブリーフサイコセラピー研究, 26 (1)

鈴木義也・八巻秀・深沢孝之 (2015) アドラー臨床心理学入門. アルテ.